

2006(平成18)年度

入 学 試 験 問 題

小 論 文

【注 意 事 項】

- 1 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開いてはいけません。
- 2 3ページから5ページに問題を掲載しています。試験開始後、そのページを確認し、落丁または不鮮明なものがあれば直ちに申し出てください。
- 3 解答用紙は1枚です。解答用紙に受験番号、氏名、科目名、研究科名、専攻名を記入してください。
- 4 解答は、すべて解答用紙に記入してください(裏面も使用可)。
- 5 試験問題の内容等について質問がある場合は、手をあげてください。
- 6 問題冊子の余白等は、適宜利用して構いません。
- 7 試験時間は、90分です。
- 8 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

- (1) 以下の文章を読んで、その内容を300字程度で要約しなさい。
- (2) この文章を読んで、あなたの考えるところを、その根拠を明確にして、900字程度で論じなさい。
※(1)の解答と(2)の解答の間は、2行あけなさい。

いまからもう20年近く前になるのだが、大きな選択を迫られたことがある。

当時、私は米国系証券会社に勤務しており、国際金融市場の現場で、日本の大手金融法人を担当する外国債券のセールスをしていた。そのとき、英国人の親しい知人から、その後の私の人生をすっかり左右してしまうような、ある個人的な提案を受け、その勧めを受け入れるべきかどうか、決心をつけかねていたのである。

彼の勧めというのはほかでもない、養子をとってはどうか、というものだった。

そのころの私は、結婚後10年ほどたっていたのだが、身体的な理由で子供に恵まれず、だったら他人の子を養子にしたらいいではないか、というのがその知人の発想だった。

「もしもその気があるのなら、いいエージェントがあるから、紹介してあげるよ」。

彼は、ごく当然の選択肢のように、にこやかに言った。そして、突然の申し出に当惑している私に向かって、さらに笑顔で続けたのである。

「僕らも、可愛い娘を養子にしたばかりなんだ。すてきな日本人の赤ちゃんで、とても幸せだよ」。

彼の妻も英国人で、やはり長く子供に恵まれなかった。だが、さまざまな不妊治療のかいあって、第1子に恵まれた。ただ、健康上の理由で第2子はあきらめざるを得ず、2人はある日本人の乳児を養子に迎え入れるという選択をしていた。

私の記憶が間違っているければ、その母親というのは未婚で未成年の日本人女性。なんらかの理由で、祝福されない子供を身ごもり、自分の手では育てられなくなつて、里子に出したのだといふ。

私にとってまず驚きなのは、他人の子供をごく自然にわが子として迎えようという知人夫婦の姿勢だった。しかも、国籍や人種の違いなどまったく意に介さないような、人間としての豊かさやおおらかさである。

「見てみて、これが娘だ。可愛いだろう？」。

その後も、彼は何度も誇らしげに写真を見せてくれた。

「素晴らしい娘なんだよ。それに息子が彼女をとても大事にするんだ。もうすっかりお兄ちゃん風を吹かせて、なにかあると自分で守ってやろうとする。彼もいいお兄ちゃんになるよ。」

写真のなかに並んでいたのは、金髪にブルーの瞳を持つ典型的な英国人の長男と、一目で日本人とわかる長女とのはじけるような笑顔だった。無邪気で、とても幸せそうな家族の写真だったが、正直なところ、私はやはり違和感をぬぐえなかった。

誰の目にも、血がつながっていないことがわかるのに、将来家族としてやっていくことに、不安はないのだろうか。ぶしつけにも、私はそのことを彼にたずねずにはいられなかった。

「僕にとっても初めての経験だからね。先のことについては、僕だってなにも言えない」。

そんな前置きをしてから、彼は言った。

「だけどね、子供はどの子も世界中みんなのもの。次の地球を担う、みんなの財産だから」。

なんのてらいも気負いもなく、ごく当然のように彼は笑った。あれから20年近くがたったいまも、彼らはロンドン郊外で幸せな家族生活を続けている。

私は夫とも話し合いを続け、悩みに悩み抜いたが、結局、養子という選択には、どうしても踏み切ることができなかった。

いま思うのは、あのころの私に、この夫婦のようにメードを雇い、仕事を続ける母親をサポートしてくれるような社会的インフラが完備されていたら、どうだったかということだ。

同じころ、ほとんど同じ待遇で、同じ職務に就いていた同僚のシンガポール人女性は、当時3人も子供がいたが、やはり家事のためにはメードを、子供の世話やしつけには専属のナニー(養育係)を雇っていた。さらには、それらを可能にする十分な広さの住居もあった。

「ウイークデーは、家事は全部メード任せ。家庭のことに煩わされず仕事に没頭できる分、週末は子供たちに穏やかな精神状態で接することができるの」。

彼女もまた、こともなげに言っていた。一方私は、長時間極度の緊張を強いられる仕事を終えても、ディーリングルームを出たあとは帰宅途中でスーパーマーケットに立ち寄り、帰宅後は家事をしながら、ロンドン市場の様子を電話でチェックするという毎日だった。

近年、急に話題になり始めたものに「少子化問題」があるが、それを国家的危機ととらえ、本気で対策に取り組むことで、他の多くの問題解決にもなるのは間違いない。財政問題や年金問題な

どについても「少子化対策」が大きな鍵になるはずだ。

だが、少子化問題を語るとき、子育てをしてこなかった私には、いつも一抹の罪悪感がつきまと。そしてそのたびに、この問題が、精神と肉体の両面において、女性にばかり負担を強いいるものであるかぎり、改善は望めないとも思う。

この国で子供を産みたい、この国で子供を育てたい、そんなふうに女性たちが率先して考えられるような、確かな魅力やインセンティブがなければ、日本の出生率の向上は難しいのではないだろうか。

朝日新聞2005年2月13日(朝刊)

幸田真音「子供を育てたくなる国とは」(時流自論)より